

報告

中国人民解放軍の起源を探る

東北大学教授 阿南友亮

日本の中国政治研究界では、中国革命について一つの定説が長年にわたって幅広く共有されてきた。それは、中国共産党が中国の農村部を舞台に「土地革命」とよばれる社会改革をおこない、その恩恵を受けた農民からの支持を軍事力に転換して敵対勢力の中国国民党を撃退し、中国の主権を掌握したという定説である。

この定説によれば、「土地革命」によって土地の分配や小作料の軽減といった恩恵を受けた農民が先を争うように共産党麾下の軍隊、すなわち中国人民解放軍に参加したことによって共産党が国民党を圧倒するにいたった。また、この定説では、中国人民解放軍が中国の民衆の大多数を占める貧困農民や労働者の利益を反映した軍隊と位置づけられ、このような「人民の軍隊」を用いて国民党との戦争に勝利したことが、共産党による中国の主権の掌握を正当化する根拠とみなされてきた。

しかし、この定説には二つの大きな問題点があった。一つは、この定説がもともと「土地革命」が成功したという共産党の自己申告に基づいていたという点である。つまり、「土地革命」を対象にした詳細な事例研究による立証が充分になされていなかったのである。

もう一つは、この定説が共産党麾下の軍隊による兵力動員や部隊編制に関する実証研究による裏付けをほぼ完全に欠いていたという問題である。すなわち、定説は共産党の軍隊の形成過程に関する詳細な研究を経ずに確立されていたのである。

1990年代以降、共産党の内部資料や農村における現地調査に基づき「土地革命」を再検証した研究の成果が相次いで発表されるようになった。中国の特定の地域に分析の対象を絞ったこれらの事例研究では、共産党による農村社会の変革が実際には様々な問題に直面し、往々にして計画通りには進まなかったという実態が浮き彫りにされるようになった。

これにより、「土地革命」が共産党の勝利の方程式であったという定説の根拠が揺らぎ始めた。しかし、共産党が具体的にどうやって軍隊を形成したのかと

いうテーマに関する研究が極めて低調であったことを一因として定説の抜本の見直しはなかなか進まなかった。

そこで、私は、これまで「土地革命」に基づく共産党の武装闘争の象徴的成功例とされてきた 1920 年代、30 年代の広東省東部の事例に焦点をあて、共産党によって展開された「土地革命」ならびに軍隊建設に関する実証研究に着手した。日中関係がまだ比較的良好だった 2007 年から 2010 年の間に広東省の公文書館で閲覧することができた当時の共産党の内部文書が実証研究の主たる根拠となった。

これらの内部文書によれば、これまで共産党が「大成功」と自己申告してきた同地域の「土地革命」は、実は概ね失敗に終わっていた。同地域の共産党組織は、内部文書では「土地革命」が遅々として進まないことを認めていたが、外部向けの宣伝用出版物では「土地革命」の成果を誇張していたのである。

では、同地域の共産党は実際にはどうやって兵士を集めて軍隊を形成したのであろうか。実は、当時の広東省では「土地革命」などしなくても軍隊を形成することができたのである。

同地域の社会は、伝統的に自衛の慣習を有しており、血族や村落単位で自衛団を組織していた。これらの自衛団は、槍や刀のみならずライフル銃や機関銃すら装備していた。1920 年代、30 年代の広東では、特定の一族が国民党と結びつき、自己の自衛団を増強して、他の一族を抑圧することが日常化していた。そうした抑圧に直面した弱小一族は、共産党をつうじて連携を強め、国民党をバックに持つ有力一族と対抗した。要するに、同地域の共産党の軍隊は、複数の一族の自衛団から成る連合軍という性格を持っていたのである。

当時、中国全土で繰り広げられていた内戦の過程で急増した傭兵も共産党にとって重要な戦力となった。国民党はこうした傭兵を粗略に扱う傾向が顕著だったため、国民党から離脱して共産党の傘下に加わる傭兵が後を絶たなかった。

広東の共産党は、主として弱小一族の自衛団や脱走傭兵を糾合して軍隊を形成し、敵対する村や町に対する収奪ならびに国民党軍部隊からの武器・弾薬の鹵獲によってその軍隊を維持していたのである。換言すれば、広東の共産党は社会改革によって新たな軍隊を生み出したのではなく、社会における既存の武力を活用する形で軍隊を手に入れていたのである。

広東の事例研究から浮かび上がったこうした軍隊形成の手法が、他の地域や時期でも採用されていたのか否か。目下研究対象の時期と地域を広げてこの問

題を解明するための研究を続けている。